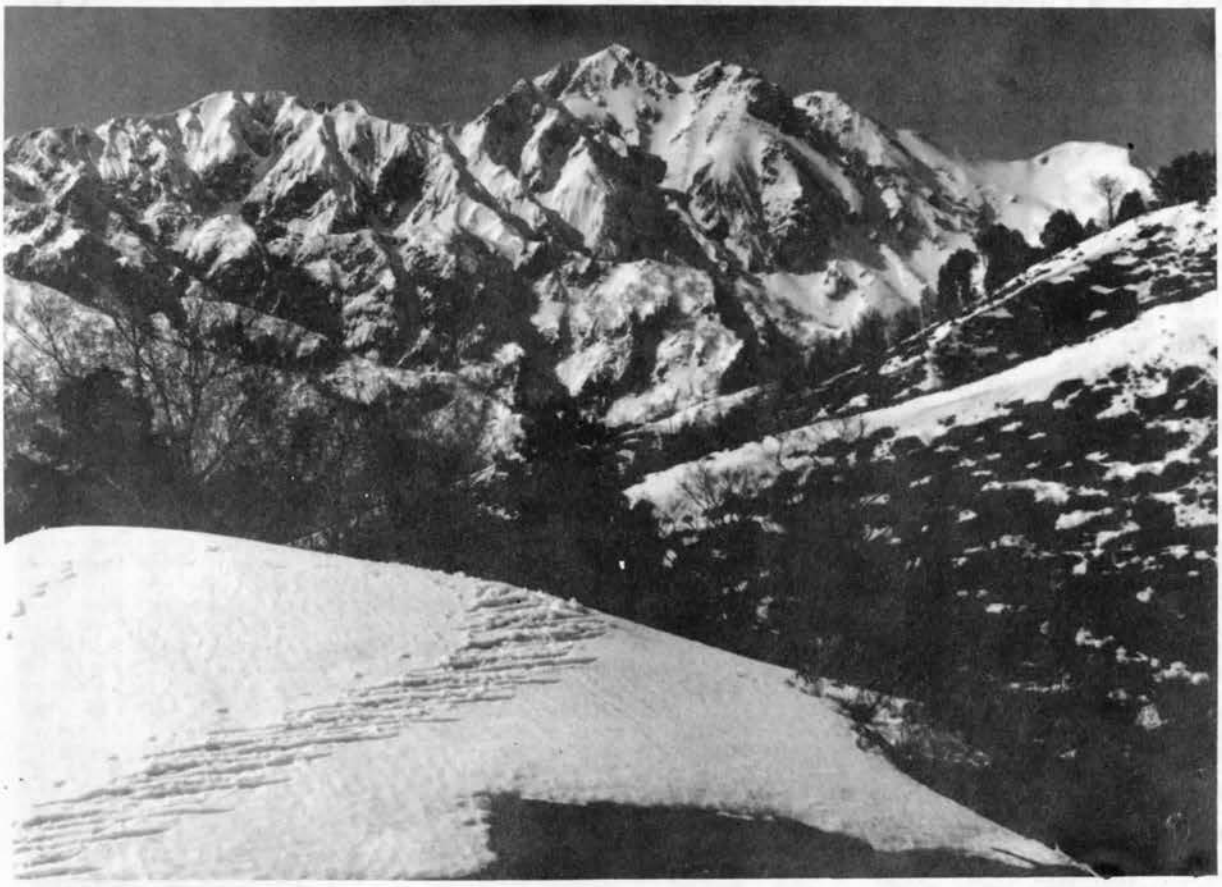
山と博物館

第23巻 第5号 1978年5月25日 大町山岳博物館



残雪　撮影　伊藤則夫

ライチョウと大町山岳博物館に希望

博物館がライチョウの人工飼育に着手したのは、今から十五年前のことであった。

当時の職員の決意と努力によって、人工飼育の研究が開始された。

職員が鈴ケ岳に数年間…

約一ケ月余りの現場住込みによって、産卵から成鳥までの生態について、そして生存しているのに必要な、風土と餌、その他について調査を行い、資料取まとめに涙ぐましいものがあった。

当時私達は、一日も早くライチョウの平地飼育が成功されて、身近なところでその生態を見られることが、急務な希望であった。

その後、新聞紙上によって、ライチョウの平地人工飼育に成功した報道は、当時としては人類が着月した時と同様な感謝と感激であった。

県・国としても、当博物館がライチョウ飼育について一層研究されて、今後全国の何処でも簡単に飼育できるようになることを、希望していること、思う。

私の希望していることは、現在の飼育方法だと高額な設備費と冷房費用が必要とされるので、経費のか、らない方法による、飼育の研究をされたい。

なお、黒四ダム附近において、餌を与えてライチョウの群集の山が誕生したならば、何んと素晴らしいことか…

実現したならば、観光面にも一役かうことにもなるだろう。

岳にライチョウが増殖しないことは、冬期間の餌が少ないことや、鷹など等々…によるものと思われます。

さまざまな悪条件を克服して、ライチョウ飼育が一日も早く一般化するよう希望します。

（西沢　聖賢）

安曇の民話（1）

長沢武

信州は民話の豊富な県として知られているが、安曇地方と呼ばれる南北安曇郡一帯も、昔から民話の豊庫として広く知られている。そこで、その中から山にまつわる民話を取り上げてみた。

一、安曇民話の双璧

先ず私達の祖先達が、原始信仰の中でとらえた雄大な民話として、県下の各地に語り継がれている「でいらぼっち」の話と、安曇一帯から東筑・小県にまでみられる「泉の小太郎」伝説を挙げることができる。

「でいらぼっち」の話はお、よそ次のようなものである。

何時の頃か解らないが、ずーっと昔、信州に途方もない大男が住んでいた。この男からみると、アルプスの山はまるで箱庭のようなもので、この男は坐れば一里四方、立てば頭は雲をつらぬく程だった。

この男は体が大きいだけあって、やることもでっかい。八ケ岳を富士山より高くしてやろうと浅間山の土をモッコで運んでかけた。すると八ケ岳は、

「頭重てえ、重たくてしょうがねえヨー」

と泣き出すと、怒ってその頭を足で蹴散らした。その為に前は峯が一つだった八ケ岳が八つに分れてしまった。また、一夜山はこの男が一晩で背負ってきたもので、縄目の跡が今も残っているとか、各地にある湖沼は彼が歩いたり、りきんで立ち上った時のその足跡だとか、松の木を引き抜いて空高く投げ上げ、落ちた所が唐松岳だなどと誠にスケールの大きい話が伝っている。

「泉の小太郎」伝説についても、地域により内容に違いはあっても筋書きは同じで、その昔、安曇、筑摩の一帯は満々たる湖だったが、犀竜と白竜という神の化身の間に生れた子供の泉小太郎は、或時母犀竜に、

「我は諏訪大明神の変身なり、山の一角を破り湖の水を北海へ流し、そこに平地を出現させ、拓き、人里を作り氏子の繁栄をはからん。汝我が背に乗るべし」とうながされ、その背に乗って山清路の巨巌を突破させ、水路を開けて湖の水を日本海に流し出させ、筑摩、安曇の平野を出現させた、というのである。それで、その川を犀川と呼ぶようになった。

やがて母犀竜と父の白竜は仏崎の裏山の岩穴に隠れ、泉小太郎もそこへ隠れたと伝えられるもので、この二つの物語りは、雄大さにおいて安曇野伝説の双璧と言えるだろう。

二、猟師に関する民話

渋右衛門と黄金の弾

昔、白馬岳の麓の青鬼という村に、渋右衛門という猟師がいた。彼は六尺を超す大男で、すねの毛は四寸もあり、それをこき下げて藁でく、れば脚絆もいらない。目はぎょろりとしてきつく、髭面で、一日に三十里も歩く猛者であり、白馬岳一帯から戸隠の裏山をまたにかけて猟をしていた。人は「鬼渋」と呼んでいた。

或時西山へ猟に出かけ、白馬岳の二子岩の穴の中で泊ったことがあった。夜になると山姥が現れ、

「渋右衛門よく来たな、タバコを一服くれや」という。恐る〳〵さし出すと、一掴み取って一度にキセルにつめてうまそうに吸ってから、

「渋右衛門ワリャーぼた餅が好きだったいナー、ワレの来るこたあズーッと前から解っていたゾエ」と言って奥からぼた餅をたんと持ってきて、「さあウンと喰え」と言う。あまり美味いので一つ土産に持って帰ろうと考えると、

「此処で喰うはいいが、家へなんぞ持っていったってだめだぞよ」と言った。

然し山中で山姥に逢った証拠にと、そっと一つを懐に入れて山を下ったが、二股まで来て出してみると、それはただの石だったという。

山姥は又その時、彼に黄金の弾を一つくれ、「この弾は好きな所へ射てば必ず命中し、左手を伸していると再び掌にもどってくる不思議な弾だ。この弾が返ってこない時があったら猟師をやめるがいいぞよ」と言った。

戸隠の山へ出掛けた時だった。夜中寝ている渋右衛門の上に何物かが襲いかゝり、どうやっても払いぬけることができなく、息の根が止りそうで次第に苦しくなってきた。その時突さに思い出したのが例の黄金の弾だった。彼は銃を取るとす早くこの弾をつめ射った。と、今まで苦しかった息が不思議と楽になり、しめつけられていた体も自由がきくようになった。夜が明けてみると、そこには一丈を超す大コオモリの死骸があったという。

この他、渋右衛門にまつわる話は幾つか伝えられている。

九兵衛岩

明治の初めの頃の話である。九兵衛は猟達者で、白馬の麓の村では、猟にかけて彼の右に出る者はなかった。

或晩秋のことだった。彼は仲間と連れ立って五竜岳の裏山へ猟に入っていたが、その日は途中で天候が急変し狩小屋へ帰ることができなくなって、とある稜線近くの大岩が折り重なって庇状となっている、猟師達がよく野宿する岩屋で假泊することにした。その日かなりな獲物を射止めてご機嫌だった彼は、枯木を集めて大火を焚きながら、眠気覚しに日頃得意な謡ののどを、夜長のつれづれに吟じ始めた。その声は朗々としてやがて雲の切れ間から青い月の光がさし込んでくる頃になると、彼の朗詠は佳境に入って天地の根元山ノ神の魂をもゆり動かすかにみえたと、その刹那不動と思われた大岩が「ギヤユー」という音と共に崩れ、彼はその下敷きとなってしまったのである。幸いそばにいた仲間は寸手のことで身をかわし助ったが、彼の上半身は崩れ落ちた岩にはさまれ、手のほどこしようもなかったという。

そんなことがあってから猟師仲間では、岩小屋に泊る時は大火を焚いたり謡をすることはタブーとされるようになった。

カモシカ捕りにまつわる話し

カモシカ猟が禁止されたのは大正十四年十月であり、国の天然記念物の指定を受けたのは昭和九年五月であって、それは近々五十年程前のことであるが、それまではカモシカ捕りは山国の猟師にとって大事な収入源であったと同時に、深い雪の中の岳山猟であったから、命がけの仕事であり、幾つかのエピソードが残っており、それらは今では民話の世界の物語りとなりつゝある。

喜作の死　大正十二年三月六日、雪の降る夕方だった。「おっ母！」と唯ひと言いっただけで、犬の窪の矢蔵は妻かねよの前にへな〳〵とくずれ込み、おい〳〵泣き出した。見ると一ケ月近い無精髭は白く凍り、つららが下っている。

さあ大変と彼女は夫を家にかゝえ込み、「お父様しっかりしてくりよ！」と怒鳴りつけ、訳を聞くと、「喜作さと村の衆六人も雪崩でやられた。俺はやっと這い出して助けを頼みに来ただ」と言うのである。

早速半鐘が連打され、村人達は手に手にこすきや食糧を持って、三十キロ奥の遭難現場の棒小屋沢の狩小屋へ向った。

喜作は嘉門次の後を継ぐ北アルプスの主で、冬はカモシカ猟に明け暮れ、既に三千頭以上も捕り、南部のカモシカはほとんど捕り尽し

て、今回は北部の鹿島槍一帯を一ケ月も前から猟に入っていたのであった。雪崩は六日未明、喜作父子を含む七人が猟小屋に寝ている所を小屋もろ共襲ったのだった。が、死んだのは喜作父子の二人だけ、アルプスの主、不死身の喜作といわれ、雪崩に遭っても雪の中で呼吸ができるよう節を抜いた竹筒まで用意して歩いていたという山の猛者が死に、素人の地元の猟師は全員が生き残ったのはおかしい。他所の猟場を荒したせいではないか？、分前で争いがあったのではないか？などこの遭難事件は噂は噂をよんで、大部世間を賑わせたものだった。

ブチのカモシカ　昔からブチのカモシカは変事のきざしといわれている。大正十一年二月のことだった。北城の松沢勘左衛門の家では夜遅くまでカモシカ猟の準備が進められていた。集った者四人、勘左衛門、丸山俊明、秋田からやってきた佐藤名兵衛と他に一人、それに秋田犬のチロともう一頭。一行は二十日間の入山の予定で食糧、弾薬など荷作りをし、翌朝は快晴に恵まれて白銀の五竜岳目指して八方尾根を登って行った。

それから十日程、一行は大黒鉱山の精練所跡を寝城に十数頭のカモシカをものにし、一たん下山し、食糧を補給して再び入山した。そして六日目、その日もいつもの如く二人ずつに分かれて猟に出たがいくら歩き回っても獲物の姿を見ない。夕方になって帰ろうとしていると向いのヒシの上に大きな一頭のカモシカが現れた。二人はこれぞとばかり砲火をきった。しかしカモシカは鉄砲が火を吹く時、首を振るだけで逃げようともしない。これはおかしいと良く見ると、なんとそれはブチのカモシカだった。勘左衛門は昔からの言い伝えを思い出し、急いで鉄砲をしまい連れをうながして小屋に帰った。

その夜このカモシカのことが話題になった。しかし迷信を信じようとしない若い二人は翌日再びそのカモシカを追った。だが夜になっても二人はついに帰ってこなかった。夜中にチロだけが帰ってきた。

それから雪融けまで幾回か捜索隊が繰り出されたが、二人の遺体はなか〳〵見つからず、七月がきて山に美しい高山植物の花が咲く頃ようやく見つかった。

三、アルプス越えの道

北アルプスは信州と越中や飛騨との境に屏風のように立ちはだかり、昔から交通上の大きな障害となっていた。

しかし、この山脈を越えれば距離的には一番近いので、昔から峠をたどって山道が開けていた。

さら〳〵越えの道

天正十二年、年の瀬もせまる頃となると北国に雪はひひとして降り続いた。富山城主佐々成政は、城中の一室にこもりじっと考える。主君信長が一昨年本能寺に明智に討たれるや彼の身辺の状勢は逆転、周囲はすっかり敵となってしまったのである。ただ空いているのは前面の日本海と、後の北アルプスだけ。

家康に逢いたい、逢って前後策を講じたい、かくてひそかに練られたのが雪中アルプス越えであった。側近の者には成政病気といつわり、毎日お膳を運ばせておき、夜陰に乗じて城を抜け出した。目指すはアルプス、一行百余人に及ぶ大部隊であった。そしてさら峠、黒部川を渡りついに針ノ木峠を越え信州に出、とある樵の家を見つけて宿をこうと、老いたる樵は膳を潰し、「これは変化の者ぞかし、今時この雪中に人間技にはあらじ」と不審がった。成政はこうして無事浜松に出て家康と逢い、再び雪のアルプスを越えて富山城へ帰った。

このコースについて地元には、蓮華岳の南の北葛岳を越え沢を下り大出に出たという説もあり、大出の大姥尊は成政が寄進したものだともいわれている。

針ノ木峠の遊女の碑

昔松本の町に雛菊という気立ての優しい遊女がいた。或夏針ノ木峠を越して炭焼きの若い衆が松本の町へ遊びに来た。

三吉もその中の一人だったが、彼が買った遊女が偶然にも雛菊だった。彼は一夜で雛菊がすっかり気に入り、雛菊も又、純朴な山の青年に恋を感じるのだった。二人は再会を約束して別れた。

秋になった。晩秋の或日三吉は約束通り雛菊を尋ねて来た。が、その夜青年は急な病を起し三日目に死んでしまった。若者は死の間際、越中にいる両親に自分の死んだことを報せてほしいと言い残して死んで行った。

雛菊は約束を果すべく針ノ木峠の道を急いだ、だが降りしきる雪は女の足に重く、彼女はついに峠の近くで越中の方を向いて手を合せたまゝ、力尽き死んでしまった。

翌年雪が消えてその死体を発見した炭焼き仲間や松本の関係者は、彼女の純情を哀み峠の近くに石碑を建て、やったという。

針ノ木道と抜け詣り

大工の源七は昨年愛する妻せいを病いで亡くしたのだった。一年経った今も彼の脳裏からおせいのことが忘れられない。

「立山地獄へ行くと生前の死者に逢うことができる」という巷の噂に、彼はついに息子の源八と其処へおせいに逢いに行く一大決心をした。

「源八見ろ、あれが立山という尊い山だ、あの山の裏におっ母のいる地獄があるんだゾ。」ようやくたどりついた針ノ木峠の上で源七は叫んだ。立山の頂は無言のまゝに白い雲が去来している。

しかし、其処迄はまだ道程は遠く、峻しい谷を下り黒部の川を渡り又、登らねばならない。何処に加賀藩の役人がひそんでいるか知れない命がけの旅である。

「お母に逢ったら、うんと甘えてもいいゾ」地獄で逢えるおせいのことを考えながら、この貧しい親子は見つかれば打ち首となる、立山への抜け詣りの道を急ぐのであった。

参議秀綱公と奥方の死

今から四百年程前の話である。京都姉小路高時の子参議家綱は飛騨の国司に任ぜられ、後代々勢力を増して自綱の代には飛騨全土近くを手中に収めた。しかし、興亡は時の運、信長が本能寺で明智に殺されて世の大勢が秀吉に傾くや、かねてから姉小路に敵意を持つ金森長近は時の勢を得て一気に攻撃に出た。

その時二男の秀綱は松倉城にあったが、家臣藤瀬新蔵の寝返りで城に火を放たれもろくも落城となった。秀綱は最早やこれ迄と見切りをつけると、夜陰に乗じて城を抜け出し、奥方と侍女を伴っただけで信州を目ざして落ちていった。途中一行はこのまゝ揃って行くことに身の危険を感じ、落ち合う先は日頃懇意にしている波田城主の所としめし合せ、夫人と侍女は桁尾を経て中尾峠を越え上高地へ出、さらに徳本峠を経て島々コース、秀綱公は平湯から安房峠を越え大野川を経て島々と別々の道を進むこと、した。

馴れない山道の旅を続け徳本峠もどうにか越した奥方と侍女は、旅の疲れでまず侍女が倒れた。（今もそこは下女沢と呼んでいる。）供を張り合いと頑張ってきた奥方も間もなく柚達に出合い、「山中に美人一人とはおかしい狸か狐の仕業に違いない」と着物をはがれて樅の木に吊され、あえない最期をとげる。

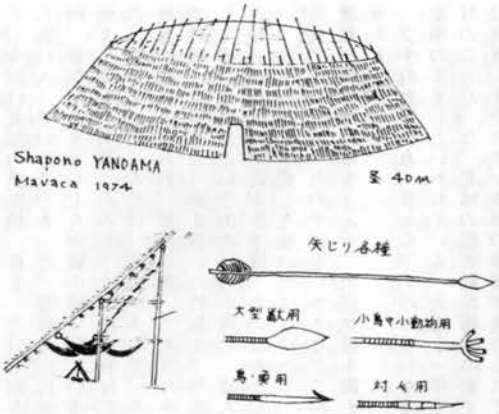
一方の秀綱も追手に後をつけられ、一時は逃げ込んだ家の主人の気転で桑ボテの中に隠されて難を逃れるが、神祠峠の近く土民によってあえない最期をとげるのである。

今秀綱夫妻は島々近くに秀綱社として祠られている。

（白馬村役場・山博調査員）

文明から遠い人々 (2)
―ヤノアマ族―

堀　勝彦



彼等の武器といえば弓矢である。どこへ行くのにも必ず手にしていて、まるで体の一部分といっても過言ではない。弓は硬いヤシを骨でけずって作りあげるが、私たちではたやすく引けそうもない剛弓である。矢はヤシ科の植物の茎を使って作るが、二㍍もの長いもので四種類の矢じりが使用される。その中には大型獣を射るためのものや、対人間用のものには、時としては猛毒のクラーレが塗られている。

ヤノアマの成人は、男女を問わず口の中にタバコを入れてしゃぶるため、ユーモラスな顔つきをしている。アマゾンのインディオの間では、煙を吸う葉巻き、嗅ぎタバコ、葉をすりおろした汁をなめるなど、タバコのたしなみかたもさまざまであるが、このヤノアマのタバコのたのしみかたは、珍らしいものであった。摘みとったタバコの葉を、火であぶりながらもんで、塩をとる木の葉の灰を間にはさみこみながら巻いて、棒状のものを作ってしゃぶるのである。

アマゾンの広大な原生林には、さまざまな薬用植物が生育していて、インディオたちはそれを利用して、病気をなおしたり戦意をたかぶらせたりしている。それらの植物の中には、幻覚をひきおこすものがかなり知られている。原住民たちは、植物アルカロイドがひきおこす幻覚の世界に入りこんでは、超現実的な力をかりて、病気をなおし自然界の草木や獣たちとも、意志を通じあうのである。

ある日ヤノアマのエペナ（またはヨッポ）とよばれる幻覚剤を使っての、病気をなおす儀式をみることができた。エペナと呼ばれるアカシアに似たマメ科の木の皮から作られた幻覚剤は、黒い微粉末である。

シャーマンは、エペナトラと呼ばれる細い筒にエペナを入れて、他の男から鼻の中へ吹きこんでもらったあと、「ヘイヤッ　ヘイヤッ　ヘイヤッ」とかけごえをかけながら、踊りだす。ときにははげしくときには小声で、大きな動きで足をふみならし、汗をしたたらせながら、次々にエペナを鼻へ吹きこまれて幻覚の世界に入って行くのである。彼の眼は一点をみつめながら、そこにいる悪霊をみつけるために、幻覚の世界で木々や水や太陽や雲などの、あらゆる精霊たちと語りあって、病人にとりついている悪霊をさがしだして、病人の体をさすり、叩きつまんだりしながら悪霊をきりとって取り出し、大きな声とともに遠くへ投げすてるしぐさを、何度も何度もくりかえすのである。他の男たちも互にエペナを吹きこみあって、病人をとりかこみながら幻覚の世界に入りこんでゆき、シャーマンと共にはげしく踊りながら、幻覚の世界の中で互いに評定をはじめるのであった。彼等の眼は現実をみつめている眼ではなく、はるかに遠く現実を超えた精霊たちとの語りあいのために、まるで熱に浮されているかのように光を帯びているのだった。

私も仲間と共に、この儀式に加えてもらおうと、エペナをやってみた。若い男が吹きこんだエペナの粉末が、鼻の奥に達した瞬間になにかが頭の中で爆発したような激痛を覚えると同時に、涙と鼻汁がどっとあふれるのであった。ヤノアマの男たちをまねて、尻を地におろし膝の上に頭を乗せて眼を閉じていると、五分ほどたって眼を閉じた暗闇の中に、なにか光るものを感じた。突然色彩の世界が現われた。水の流れが見えるかと思うと、シャポノが見えたりヤノアマの女の子があらわれたり、次から次へとさまざまなシーンがあらわれては消える。すばらしい幻覚の世界であるが、このエペナの効果は不思議なことに、幻覚のみえているときでも、目を開いてみれば現実の世界は変りなく見え、耳をすましさえすれば、仲間たちの声もヤノアマの声も普通に聞えてくるのである。続けてエペナを吸いこんでいれば、幻覚は果しなく続くのであろうが、ほどほどで止めてみた。幻覚が去るとものすごい疲労感におそわれた。

ヤノアマの女たち　マバカ1974

シャーマンには、その後も他の場所の他部族の村でも何人かと話をしたが、その超能力とでも表現するしかない事例を見せられて、現代科学が小さく感じられたことが、しばしばあった。

ヤノアマの世界での夫婦関係は、一夫多妻であった。実力のある者、例えばマバカのシャポノの酋長は、五人の妻を持っていた。年令がちがう五人の妻たちが、仲良く生活をしているのであった。結婚については、部落内の結婚や親近者同志の結婚は、いわゆるタブーとされているので、他の部落から迎え入れるのであるが、なかには略奪して結婚することもあるようである。

ワイカと呼ばれて恐れられていたヤノアマたちは、共に暮してみると人みしりをしない温かな心をもっていた。一週間というとても短い間の接触では、言葉もなかなか通じあえないのであったが、彼等はなんのへだたりも感じられないほど、親しくしてくれた。腹を満たすためにする狩も、必要量だけで余分な獲物を殺すことをしない。腹が満足してさえいれば、ハンモックに吊りさがってゴロゴロしている彼等は、まったく自然に同化しているのであった。そんな彼等をみていると、文明という怪物に呑みこまれて生きている私たちの生活が、急に色あせたように感じられるのであった。

一九七四年の日本奥アマゾン探検隊の一員として、六ケ月を緑の大ジャングルで過ごした旅のひとときの、ほんのわずかの経験である。

（写真家）

山と博物館第23巻第5号　一九七八年五月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）